

# 平成 28 年度 私立学校専門研修会・教育課程部会 実施報告書

## 研究のねらい

### これからの私学教育 ～高大接続改革・新学習指導要領への対応～

平成 27 年 9 月に高大接続システム改革会議から、高校教育、高大接続、大学教育の三位一体改革に対する基本的な内容・実施方法及び実現のための具体的方策についての中間まとめが公表された。10 月には関係諸団体からのヒアリングがあり、更に議論を詰めた上で、平成 28 年 3 月 31 日に最終報告がとりまとめられた。その中で、高等学校基礎学力テスト（仮称）及び大学入学希望者学力評価テスト（仮称）については、平成

27 年 1 月 16 日に公表された「高大接続改革実行プラン」に沿い、それぞれ平成 31 年度、平成 32 年度からの導入にむけて審議が続く。

加えて、教育課程企画特別部会では、平成 27 年 8 月に「論点整理」が取りまとめられ、各学校段階・教科別ワーキンググループでの検討を経て、平成 28 年度中に答申、平成 29 年度に新学習指導要領告示、高等学校では平成 34 年度から年次進行で実施される予定である。各私立学校においては、これらの動向を見据えつつ、私学としての先進性、独自性をもった教育を発信していくことがこれまで以上に求められる。

今回は、教育改革と学習指導要領改訂は両輪と捉えた上で、主に新学習指導要領に焦点をあて、文部科学省による教育改革の動向に関する講演、当研究所による解説を含めた報告を行い、これからの私学の教育課程のあり方について考察する。また、田園調布学園中等部・高等部を訪問し、同校の 21 世紀型スキル育成を目指した取り組みである協同探求型授業及び土曜プログラムの実践報告と授業視察を行う。

これらのプログラムを通して、参加各校が特色ある教育課程を編成していくヒントを得るとともに、私学のネットワークを構築し、未来の私学教育を作り上げていく契機となることを願っている。

会 期 平成 28 年 6 月 24 日（金）

会 場 FORUM8「8階 クイーンズスクエア」 渋谷区道玄坂 2-10-7 新大宗ビル  
田園調布学園中等部・高等部 世田谷区東玉川 2-21-8

参加者数 136名（募集120名）

参加対象 理事長・校長・教頭・教務主任及び教育課程編成等担当教員

基本日程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
	9:30							16:30		
6月24日 （金）	受付	開 会 式	基調 講演	報 告	昼食・移動	挨拶・学校紹介 ・実践発表	学校視察 授業視察		研究協議	開 会 式

## 研修プログラム

1. 基調講演 「成熟社会に相応しい教育課程と学習指導要領改訂」  
講師 合田 哲雄 文部科学省初等中等教育局教育課程 課長
2. 報告 「日私教研・中高連からの報告」  
報告者 中川 武夫 一般財団法人日本私学教育研究所 所長
3. 学校視察 田園調布学園中等部・高等部
  - ①学校紹介
  - ②実践発表 「21世紀型スキルの育成—協同探求型授業・土曜プログラム—」  
発表者 荒川 知子 田園調布学園中等部・高等部 副教頭  
発表者 兼子 尚美 田園調布学園中等部・高等部 進路指導部長
  - ③授業視察
  - ④研究協議 ①田園調布学園中等部・高等部の先生方との質疑応答・研究協議  
②参加された先生方との情報交換

## 学校紹介（田園調布学園中等部・高等部）

1926年調布高等女学校として創立。1947年に調布中学校、1948年調布高等学校が設置認可された。2004年に田園調布学園中等部・高等部と校名を変更し、2014年からは併設型中高一貫教育校に移行した。

「捨我精進—『我（が）』を捨てて『我（われ）』を生かす—」を建学の精神とし、創立以来、「捨我精進」の実践を通して、健全な人格と高い学力および真の教養をそなえた女子を育成してきた。一貫して知・徳・体の調和した教育活動を行い、「3つの心—強い心・思いやりの心・素直な心—」を育み、社会に貢献できる人格の完成を目指している。

中高一貫の6カ年を、生徒の発達段階を考慮した3期（第1期・基礎育成期—中1／第2期・個性伸長期—中2・3・高1／第3期・発展充実期—高2・3）に分け、学習・生活・進路指導の指針としている。

2002年からリベラルアーツとしての「土曜プログラム」が始まり、2015年からは学年ごとに学ぶ「コアプログラム」、一人ひとりが興味・関心に応じて選択する「マイプログラム」に再編成して、「21世紀型スキル」を身につけることを目標とする講座を設定している。2014・2015年度文部科学省土曜授業推進事業に私学で唯一認定されている。また、2014・2015年度東京私立中学高等学校協会の研究協力学校として、「アクティブ・ラーニングによる思考力育成プログラム」に取り組んだ。

## 講師・報告者・指導員（順不同）

- 合田 哲雄（文部科学省初等中等教育局 教育課程課長）  
西村 弘子（田園調布学園中等部・高等部 校長）  
中川 武夫（一般財団法人日本私学教育研究所 所長）

## 専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

- 清水 哲雄（学校法人鷗友学園 理事長）  
山本 与志春（学校法人青山学院 常務理事）  
北村 聡（京都外大西高等学校 校長）  
大多和 聡宏（開星中学高等学校 理事長・校長）  
助川 幸彦（学校法人村田学園 副理事長）  
川本 芳久（一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長代行）

日程・プログラム

◇6月24日(金)

《会場：FORUM8 8階 クイーンズスクエア》  
司会：川本芳久 一般財団法人日本私学教育研究所事務局長代行

08:30～09:00	受付
09:00～09:30	開会式 ◆挨拶 中川武夫 一般財団法人日本私学教育研究所 所長 ◆役員・専門委員紹介 ◆研修会運営方針説明 清水哲雄 一般財団法人日本私学教育研究所 教育課程専門委員長 ◆日程説明
09:30～10:30	基調講演 ◆演題 「成熟社会に相応しい教育課程と学習指導要領改訂」 ◆講師 合田哲雄 文部科学省初等中等教育局教育課程課長
10:30～11:30	報告 ◆演題 「日私教研・中高連からの報告」 ◆講師 中川武夫 一般財団法人日本私学教育研究所 所長
11:30～12:00	昼食
12:00～12:55	移動
12:55～13:30	挨拶・学校紹介 司会：清水豊 田園調布学園中等部・高等部 教頭 ◆挨拶 西村弘子 田園調布学園中等部・高等部 校長 ◆学校紹介 中村優子 田園調布学園中等部・高等部 副教頭
13:30～14:20	実践発表
14:20～15:30	授業視察
15:30～16:45	研究協議 ① 田園調布学園中等部・高等部の先生方との質疑応答・研究協議 ②参加された先生方との情報交換 グループA 《会場：2階・会議室》 ◆司会・指導助言 清水哲雄（学校法人鷗友学園 常務理事） グループB 《会場：2階・第2選》 ◆司会・指導助言 山本与志春（学校法人青山学院 常務理事） グループC 《会場：4階・第3選》 ◆司会・指導助言 北村聡（京都外大西高等学校 校長） グループD 《会場：5階・第7・8選》 ◆司会・指導助言 大多和聡宏（開星中学高等学校 理事長・校長） グループE 《会場：5階・化学室》 ◆司会・指導助言 助川幸彦（学校法人村田学園 副理事長）
16:45～17:00	閉会式 ◆総括 清水哲雄 一般財団法人日本私学教育研究所 教育課程専門委員長

## ◆ 概 要 ◆

平成28年6月24日(金)、FORUM8(東京都渋谷区)および田園調布学園中等部・高等部(同 世田谷区)で開催された「全国私立中学高等学校 私立学校専門研修会 教育課程部会」(以下、本部会)は、定員を超える136名が参加した。

「これからの私学教育～高大接続改革・新学習指導要領への対応～」を研究のねらいにした本部会は、教育改革と学習指導要領改訂を両輪と捉えて、特色ある教育課程を編成していくことと、未来の私学教育を作りあげていくことをめざし、主に新学習指導要領に焦点をあて、プログラムを実施した。

初日の午前中は、合田哲雄・文部科学省初等中等教育局教育課程課長が「成熟社会に相応しい教育課程と学習指導要領改訂」を演題とした講演を行い、その後、当研究所の中川武夫所長による「日私教研・中高連からの報告」へと続いた。

午後からは、田園調布学園中等部・高等部へと会場を移して、荒川知子・同校副教頭、兼子尚美・同校進路指導部長による実践発表「21世紀型スキルの育成―協同探求型授業・土曜プログラム―」を行い、その後、授業を視察した。

授業視察後は、「参加された先生方との情報交換」をテーマとした研究協議を実施し、質疑応答・研究協議や協議・情報交換を行った。

実施概要については、下記のとおりである。

## ◆開会式◆

開会式では、主催者を代表して中川所長、清水哲雄教育課程専門委員長の2名が挨拶した。

中川：全国から多数の参加があり感謝している。教育の枠組みが大きく変化し、その対応に各私立学校は追われているが、その対応を先導する役割を担っているのが、この研修会に参加している教務の先生方である。参加の先生方に、現在の最新情報を伝えるのが本研修の目的である。文科省の合田課長に対しては、どんどん本音で質疑をして欲しい。

清水：10年に一度の学習指導要領の改訂のたびに、新しい指導要領の趣旨が理解できずに振り回されがちである。今年の3月31日に、「高大接続システム改革会議」の「最終報告」が出された。これは学習指導要領の改訂と連動している内容である。これらを踏まえた上で、私立学校はいかにして独自性を発揮するのか、そして教育課程をどのように構築するかが今後の大きなテーマとなるだろう。



## ◆基調講演◆

### 「成熟社会に相応しい教育課程と学習指導要領改訂」

講師 合田 哲雄 文部科学省初等中等教育局教育課程課長

人工知能(AI)が進化すると将来は多くの職業は消滅してしまい、現在学校で教えている学習内容も不要になってしまうのではないかと、という危惧が、今回の学習指導要領改訂の背景にはある。新しい時代を生き抜く能力を、子供たちに身に付けさせることが急務である。

子供たちにとって今後重要と考えられるのは、何事にも主体的に取り組もうとする意欲や多様性を尊重する態度、そして他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、さらにはコミュニケーションの能力や、優しさや思いやり等の豊かな感性である。

今回の学習指導要領改訂のポイントには、次の2つがある。

1つ目は、学習内容の削減は行わない、という点である。これは「ゆとり教育」か、「詰め込み教育か」という二項対立論から脱して、知識と思考力の双方をバランスよく確実に育むという基本を踏襲するためである。ただし高校教育については些末な知識が大学入試で問われることが問題になっており、そうした点を克服するため重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

2つ目は、アクティブ・ラーニング(以下、AL)の導入である。その目的は知識を生きて働くものとして習得し、必要な力を身に付けることである。したがって知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善を行う。その際には、対話的・主体的・深い学び、の3つの視点が重要になってくる。

こうした方向性のもと、小学校の外国語教育の教科化や高校の新科目「公共(仮称)」等の新設などの必要な教科・科目構成等の見直しもを行い、本年度中に学習指導要領を改訂して2020年から順次実施する。

これまでの学習指導要領は知識の内容に沿って教科ごとには体系化されていたが、今後は教育課程全体で生徒にど



ういった力を育むのかという観点から、教科等を越えた視点を持ちつつ、教科等を学ぶことによってどういった力が身に付き、それが教育課程全体の中でどのような意義を持つのかを整理し、教育課程全体の構造を明らかにしていくことが重要となってくる。

ALの視点に立った学習プロセスの効果的活用の例として、問題の発見、問題の定義、解決の方向性の決定、解決方法の提案、計画の立案、結果の予測、計画の実行、振り返り、次の問題解決へ、などが挙げられる。

このように、資質・能力と各教科等との関係を踏まえた今回の学習指導要領改訂の方向性には、1)「何ができるようになるか」2)「何を学ぶか」3)「どのように学ぶか」の3つの観点がある。

1)「何ができるようになるか」については、「この力は、この教科で身に付くのだ」といった視点を明確化し、各教科等を学ぶ本質的な意義を捉え直して内容の体系化を図っていく。

2)「何を学ぶか」は、新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共(仮称)」の新設など、各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示した。なお学習内容の削減は行わず、教科・科目等の新設や目標・内容の見直しをする。

3)「どのように学ぶか」は、特定の型を普及させることなく、学び全体を改善し、子供の学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することであり、それを教員一人一人が工夫して実践できるようにすることである。

それは、知識の習得・活用・探究という学習プロセスのなかで、問題発見・解決を念頭に置きつつ、「深い学び」の過程が実現できているかどうかを検証することである。

また、他者との協働や外界の情報との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」の過程が実現できているかどうか重要になってくる。

さらに、子供たちが見通しを持って粘り強く取り組んで、自らの学習活動を振り返り、次につなげる「主体的な学び」の過程が実現できているかどうか必要である。

これらの資質・能力を総合的に育むための学びは、全国学力・学習状況調査において、主として「活用」に関する問題(いわゆるB問題)が出題され、関係者の意識改革や授業改善に大きな影響を与えたことなどもあり、多くの関係者による実践が重ねられてきている。

ALを重視する流れは、こうした優れた実践を踏まえた成果であり、また今後は特に高等学校においては、義務教育までの成果を確実につないで一人一人に育まれた力を更に発展・向上させることが求められている。

最後に、今、東大の国際的地位が低下しているという。日本の若者が世界で活躍するためには、「答えは5つの選択肢の中に必ず1つある」という教育ではいけない、ということ認識していく必要がある。

#### ◆報告◆「中高連・日私教研からの報告」

報告者 中川 武夫 一般財団法人日本私学教育研究所 所長

私学を取り巻く環境は厳しさを増している。教育界を襲う三つの波として、第一の波は明治維新であり、第二の波は戦後復興であり、第三の波は情報化社会である。第二の波までは、知識注入型の一斉授業で対応できたが、第三の波には対応できない。

情報化社会を生きる子供たちには生きる力をつけさせる教育が必要であり、そのためにはグローバル人材育成教育をしなければならない。

また、社会の枠組みの変化も著しく、AI(人工知能)の発達により、2011年度に米国の小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業時に現存しない職業に就くだろうとも言われており、未来への対応力、「解なき社会」に対応する教育が求められている。

これは情報ネットワークの活用であり、調べれば解ることを教えるのではなく、ヒントを与えて背景や応用について指導することである。手取り足取り教えるのではなく、生徒が創造性を発揮して学習できる場をつくることにより、深い総合力を付けさせることが求められる。

社会の素材を読み解く力を育成するには、思考力・判断力・表現力・語彙力(とくに新聞語彙読解力)など教科を超えた総合力が必要である。

これらの授業を実践するためには、教師自身がしっかり勉強しなければ出来ない。学び続ける姿にこそ、生徒の信頼が集まるのである。

指導法を含めた専門教科の学力をつけ、総合力を向上させ、教員同士が教科の壁を越えて学び合い、興味の幅を広げ、様々な分野の研修を行い、情報を受け取るアンテナを磨き、生徒のひらめきに学ぶことが大切である。

次に、ALは生徒の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法であり、ディベート、ICT、グループワー





ク、実験・実習などへの活用が有効である。

また、英語教育改革の動向についても注目が必要である。大学入試における英語4技能のうち、「読む」「書く」「聞く」の3つは入試当日の一斉テストでの測定が可能であるが、「話す」については測定に時間と人手がかかる。そのため4技能を測定する英語外部試験で代替する方向性が主流になっている。

今年も全国各地で、文科省英語教育推進リーダーによる英語科教員の研修が開催された。

その一方で、小学校3年生から英語教育を開始することに懸念を持つ言語学者もいる。英語・カタカナ語（IT語）の氾濫は、日本語が現地語（土着語）になる危険をはらんでおり、併せて国語教育の充実を図るべきである。

グローバル教育については、生徒が将来どのような社会でも生きていける力を育てるのが学校の使命である。働ける・食べていける・暮らしていける、それがグローバル教育の第一段階である。そして生徒にこれからの人生を生き抜くアイテムを与えるのは、私立学校の得意技であるはずだ。

私学の特色と学校活性化については、私学は、たとえて言うなら、反物である。縦糸は建学精神、横糸は教職員であり、建学精神をたよりに横糸を編むのが私学であるべきだ。

建学精神は、式典や儀式の時だけ口にするものではなく、本来は普段使いするべきもので、毎日の学校生活の全てにちりばめられていなければならない。

教育要求と建学精神の関係を考えると、教育要求は自転車の前輪であり、建学精神は後輪のようなものである。前輪と後輪の両方がしっかりしていなければ、誰もその自転車を誰も買わないだろう。

#### ◆学校視察◆

##### 「田園調布学園中等部・高等部」

午後からは会場を田園調布学園中等部・高等部に移し、学校紹介・実践発表・授業視察・研究協議が行われた。

#### ◆学校紹介◆

同校校長の西村弘子先生から挨拶が、続いて中村優子副教頭から詳細な学校紹介が行われた。

同校では、発達段階に応じた知性・理性を育むために、「第Ⅰ期」（中1）を基礎育成期、「第Ⅱ期」（中2～高1）を個性伸張期、「第Ⅲ期」（高2・高3）を発展充実期、と位置づけている。

社会・世界に貢献できる女性になるためには、21世紀型スキルを身につけさせる必要がある。それには、課題発見（分析）、課題解決（考察）、論理的思考（発信・対話・共感）が必要であり、これらを上記Ⅰ～Ⅲ期の発達段階に応じて全ての教育活動に込めている。



#### ◆実践発表◆

##### 「21世紀型スキルの育成—協同探求型授業・土曜プログラム—」

発表者 荒川 知子 田園調布学園中等部・高等部 副教頭

21世紀型スキルを育成するために、協同探求型授業を実施している。生徒参加型授業、協同探究型授業にあたっては、シラバスの整備、成果の検証が欠かせないので学校全体で取り組んでいる。

65分授業を生かし、全教科・全学年での取り組みに加え、電子黒板・iPadなどICTを活用することによって、「生徒の発言が増えて活気が出た」「本質を見る目が育った」「主体性が向上した」「予習・復習の習慣がついた」など、多くの成果が出た。

発表者 兼子 尚美 田園調布学園中等部・高等部 進路指導部長

本校ではリベラルアーツとしての土曜プログラムを実施している。

学年ごとに学ぶ「コアプログラム」では、第Ⅰ～Ⅲ期の発達段階に応じた方向性のある企画で、思考を深め、表現することを目的として開催されている。



生徒一人一人が興味・関心に応じて選択する「マイプログラム」では、興味関心を深め視野を広げることを目的とし、1) 世界に生きる、2) 社会とつながる、3) 健康なからだをつくる、4) 身の回りの不思議にせまる、5) 知を拓く、の5分野が開催されている。



#### ◆授業視察◆

同校の5時限目の授業、「中2・国語」「中3・社会」「中1・数学」「中2・数学」「中2・理科」「高1・体育」「中1・家庭」「中1・英語」「中1・英語」の9つの中から、希望する授業を複数視察した。

授業時間を65分にして生徒に考えさせる時間をとっていることや、ICTの活用など、工夫された授業が数多くあり、参加者の目を引いていた。

#### ◆研究協議◆

「田園調布学園中等部・高等部の先生方との質疑応答・研究協議」  
「参加された先生方との情報交換」



当研修会最後のプログラムとして分散会を5グループで行った。午前中の講義から直前の授業視察までを受けての分散会となり、参加された先生方の学校の事情に鑑みながら、質疑・意見交換等が行われた。

各グループの司会および指導助言は、清水哲雄専門委員長（学校法人鷗友学園理事長）、山本与志春専門委員（学校法人青山学院常務理事）、北村聡専門委員（京都外大西高等学校校長）、大多和聡宏専門委員（開星中学高等学校理事長・校長）、助川幸彦専門委員（学校法人村田学園副理事長）、が行った。

田園調布学園での「土曜プログラム」について、ALについて、65分授業について、評価について、大学入試について、教職員の取り組みについて、など、参加者各校の現状の情報交換も含めて議題は多岐にわたっており、活発な議論がなされた。



#### ◆総括・閉会式◆

清水哲雄専門委員長が本研修会を総括した。3月31日に出された「高大接続システム改革会議」の「最終報告」を熟読して今まで何が議論されたを把握することが大切だと述べた上で、研修会参加者は、私立学校としてどのように対応していくか考えるいい機会を得た、と締めくくった。

最後に、田園調布学園の皆様への感謝の言葉とともに、この研修を終了した。

#### ◆参加者アンケートより◆ 回答数：94名／参加者数136名（回答率69.1%）

##### ●研修会への参加を決めた動機

新学習指導要領、高大接続改革、アクティブ・ラーニング（以下、AL）について知りたいという意見が多かった。

##### ●基調講演「成熟社会に相応しい教育課程と学習指導要領改訂」

新しい学力観、学習指導要領の目的、実践方法としてのALの定義などを、直接文科省から聞くことが出来てよかった。現在行われている教育活動に対して肯定的な意味で目標が設定されることに共感できた。などの意見が多かった。大学入試改革と必ず連動する形で改訂を進めてほしい。マイクの音量が小さく、内容が多く、早口で聞き取りにくかった。

##### ●報告「日私教研・中高連からの報告」

自校では教員間の温度差がかなりあり、まとまって新課程に対応しようという感じにはなりにくい、まとまり

の重要性を改めて確認できた。

私学の教員としての考え方、学校改革のあり方など、時代や社会のニーズを的確に捉えて学校運営を行うことが出来なければ、非常に厳しい競争に耐えられないと強く感じた。などの感想が寄せられた。

#### ●実践発表「21世紀型スキルの育成」

21世紀型スキルを実践するためのALで、生徒に向上が見られたものとして「思考力・表現力・主体性」は7割以上の生徒が前向きな評価をしていたが、「社会性」「学力」「自学自習の習慣」は5割に満たなかった。というとても正直な報告をしていただけて良かった。

「学力」がどのような観点のものかにもよるが、ALと学力をどのように結びつけるか、これが今後の課題であろう。

教育理念に一貫性があり人間力の育成につながっていると感じた。

土曜プログラムは他の地域では講師を集めることに限界があると感じた。

21世紀型スキルは、これから求められる力であり早くから学校を挙げて組織的に取り組んでいる点が大変参考になった。

先生方の意識変化や生徒の思考力・表現力・主体性の向上などを分析・検証の上、さらに進化を重ねていく過程で大きな効果を上げられていると感じた。

#### ●授業視察（田園調布学園中等部・高等部）

授業自体は比較的ゆったりと一般的な進め方であったが、ICT教材などをごく自然に活用されているところが印象的だった。学校全体で進めていることが理解できた。

思考錯誤しながらも生徒に考えさせる時間をとる姿勢が大切なのだと思った。

授業時間を、50分より65分にした理由がわかった。

21世紀型のスキルを各授業へどう入れていくのかが、大きな課題だと思う。教員がそのようなスキルを理解することと同時に、日常の授業をしなくてはならないという現状が見えた。もっと何を教えるのかをはっきりさせたいと思った。

#### ●研究協議

A：他校でも様々な課題があると知ると同時に、その克服のアドバイスを受けられた。多くの学校で、学校全体で取り組む難しさに直面していることがよくわかった。各学校の進み具合がわかって良かったのだが、AL＝グループ学習、ICT化と考えている先生が多いのには少々がっかりした。田園調布学園の先生方への質問コーナーがあれば十分だった。

B：65分授業の展開方法が参考になった。参加した学校では学校改革のため様々な検討をしていた。中高一貫校からできることは多いと思う。メリットを最大限活かしたら良い。2時間は欲しかった。

C：ALだけでなく、様々な情報を聞くことができてよかった。評価について、ALと大学入試についてなど、疑問に思っていることはどこも同じなんだと共感することができた。小グループで話す時間がもう少しあってもよかった。

D：田園調布学園の若い先生方が堂々と発言している姿を見ると教員の成長を感じた。ALへの取り組みは教員を成長させるのだと感じた。自校でも若い先生に経験を積み成長させたいと思った。事前にテーマが決められていると協議はスムーズに進むと思う。

E：田園調布学園における様々な取り組みを知ることができて大変参考になった。土曜プログラムは非常に興味深い。自校でも土曜日を活用した総合学習の講座を設けているので、考え方は同じだがそこにALの手法や教科横断的なリベラルアーツの要素を融合させて、生徒の思考力やプレゼン能力、コミュニケーション力、主体性等を伸ばしていくことができると考えている。自分が視察した授業者がおらず残念だった。

#### ●研修会全体について

大変内容の濃い研修会だった。大変タイムリーで助かった。学校（教育）改革に取り組む勇気がわいた。他校視察はとても新鮮で大変勉強になった。教育課程の改訂に向けた研修に、もう少し時間をかけて欲しかった。来年は告示後には具体的な内容について検討できる研修会を開いてほしい。高大接続や教育課程について、もっと突っ込んだ話、アドバイスがあればよかった。

FORUM 8は狭く、画面もとても見えにくかった。もっと広い会場が良かった。日程がタイトすぎる。もっとゆとりと情報の交換をしたかった。



基調講演・報告については更に時間をとってお話を聞くことができればよかったと思った。

●今後の希望

□会期

例年通り（6月中下旬）が良いという意見が多かったが、夏休み期間の希望もあった。

□開催地

例年通り東京で、という意見が多かったが、近畿を希望する意見もあった。

□取り上げてほしいテーマ・内容

中川所長の話にあった「実際、現場でどうするべきか？」という内容が聞きたい。

新任の教務部長を対象にした研修を希望する。（教務部長3年以内対象で行うなど）

ICT教育にフォーカスした内容を期待する。

自分の教科、理科に関して実践と理論のバランスや授業の組み立てなどもっと勉強したい。

新カリキュラムへの取り組み、新テスト、学校改革、私学におけるカリキュラム・マネジメントの実践例。

●その他

田園調布学園の管理職の先生は参加者からのご意見をいただきたいと言われたが、それを伝える（質疑する）時間が設定されていなかったのが残念。

◆都道府県別参加者数加者 ◆

北海道	2	東京	30	京都	3
宮城	7	富山	2	大阪	8
山形	2	石川	1	兵庫	6
福島	3	福井	1	奈良	1
新潟	6	山梨	2	島根	1
茨城	2	長野	2	広島	9
栃木	2	静岡	1	高知	1
群馬	2	愛知	10	福岡	5
埼玉	1	三重	2	大分	1
千葉	9	滋賀	1	宮崎	3
神奈川	10	合計 29都道府県・136名			